小便小僧

池田　隆

湖畔の野外美術館で若い女性の裸像を眺めていると、ブロンズでなく生身の人間だったらと妄想する。ローマの市街などでダビテやアポロンの男性像を見て、逞しい肢体をもつオリンピック選手を連想する人もいるだろう。

浜松町駅を電車で通るたびに、小便小僧の真似をするお茶目で勇敢な男の子がいやしないかと内心期待している。その時の駅員の慌てぶりが目に浮かぶのだ。この想像が小学生時代を思い起こさせた。

学校の前に川が流れていた。当時は黄色い旗をもった校外指導の大人などいなかった。下校時に悪ガキ仲間と並んで川面に向って放尿する。誰が一番先まで飛ばせるかを競う遊びである。初速度を上げるために時間中から我慢し、如何なる角度ならば最も遠くに達するかを試し、既に高校の物理で習う放物運動を体験学習していた。校門から出てきた優等生の女の子に背後から「先生に言いつけるわよ」と叫ばれると、「お前たちには出来ないだろう」と言い返す。

やがて戦後復興が進み欧米との交流が盛んになると、立ち小便の風習はわが国から消えていく。北条攻めの際、秀吉と家康が小田原城に向って連れションし、関東移封を決めた逸話は有名。それが発端となり大都市江戸が誕生した。これこそ男子の本懐といえる。だが今では田舎道で草叢に隠れて用をたす程度しか、当時の遺風は残っていない。

家庭ではトイレが洋式化し、男性の小用便器を見かけなくなった。腰を引き上から用心深く抑えながら用をたす。お気の毒にも恐妻家の知人は「周りが汚れるから座って用をたせ」と妻から命じられたという。

わが国では成人男子の精子が減って、人口減に拍車を駆けているらしい。屋外だけでなく家でも慎重に戦々恐々と小用を果たさねばならぬ。この事態が精子減少を招いているのではないか。　このチン仮説は医学的に将来認められるかも知れぬ。人類の大問題だが、発想者としてはオシメの厄介にならぬうちにこの世から早くオサラバしたいな。